

## 金ヶ崎手帖



金ヶ崎にいた。ちがいのところはかなり前から聞いていたが、全然お目にかかることはなかつた。しかし、つい最近きわめて幸運な形で対面することができたのである。

七月三十日の午後九時半頃のことせつた。天王寺駅から山王町の方へ向って歩いていると、旭町の芝居道具屋などがある辺りで、目の前三メートルばかりの所を走り抜ける動物がいた。二〇センチより少し長い位で、尾の長さが体の半分近くもある細かくて、本当にすばしここにね。道を横切るのにかかる時間は一・二秒程度せつたろう。

それが見た瞬間、「あれは何でも話を聞くこと禁物することほどできないし、仲の良いつがしが動物園から金ヶ崎にかけ落ちした」ということの可能性はまず少ない。とすると奈白山云々の方が信頼度は高いようだ。

「これらはネズミ好んで食べるものがから金ヶ崎でエサに不自由することはない。少々の要領さえがまんすれば」「ここは天國金ヶ崎」というところだろうか。

この「いたち君との出会いの後知つた」とだが、人が歩いている前を横切るということは起の起のことせつといふ。つまりいたち君は、度回じ道を運らせることから、人との文際とか、音信が走るとか、大事な人が死んじ舟の北候たとかいふのである。これを「いたちの道筋」とかいうのをどうだ。

あの実に可愛い「いたち君」、そういう不

ちらしに姿を求めて逃げ込んだ渾の「かいしゃをしゃがむようにしてのぞき込むと、可憐うしじにつきで「いたちを見上げてくるではないか。すぐに海に引かれてしまったもの、逆三角形で本オの所がほんの少しふくらんだ小さな魚は、やはりいたちにまちだいなかつた。

その時のイタチの腹は天真らんまんというのか、實にあひけないもので、当分の間忘れることはなつたろう。それにしてもこんな幸運な形で対面できるというのはもうざらにありまし。今まで金ヶ崎にいたかいるといふことを信じるようになつたのだが、またな二度と金ヶ崎に見せまいとは思はせぬからも、いたちが金ヶ崎に生息するようになつたのだろうか。

手元にある平凡社の百科辞典でいたちを調べてみると、「平地から低山の水辺に多く、しばしば人家内にも住む」とある。ある人の話によると、もどもヒ天王寺公園の奈白山は、昔からいたちがたくさんいたといふ。またあるのしる。したくすれば、いたちにはみかけにふらないものだ。それも、「性は残忍で、獲物を殺すのが好み、血を吸い脳を食うのみで捨てることが多い」(前同)といふから、なるほどとも思うのである。この不景気な時代で、いたち君が何事か不吉な事をこの僕にもたらしてくれなければ、当分の間、楽しい自慢話になるにちがいない。

金ヶ崎にいた。ちがいるといふ話はかなり聞いていた。一と、こんどの金ヶ崎手帖の筆者である「い」君は語りていて。書いていることはウリではない。比いのは、しかし、呻んまり手帖を彼に何度もしては私、前回まで金ヶ崎に彼、ついで君は、ソラナモンイルワケガバテビと云々張りて信しながら、前回までの筆者「い」は少し、わけで若さあふれる新筆者の筆者「い」が、お次文代えで、わくわくしてきめこんで、登場する。